山陰の「小さな文化」を楽しむ

ひだまりのおと

第 3 号　2021

特集：「むすぶ」

島根県立大学短期大学部　総合文化学科

Green's　Baby（松江市）

本誌『ひだまりのおと』は、島根県立大学短期大学部総合文化学科の授業「文化情報誌制作」の成果物です。
特集ワードからそれぞれの発想で取材先を決め、写真撮影、記事執筆、誌面レイアウトまで、学生が行っています。

目次

巻頭（寄稿）

山下 武之（NPO 法人松江サードプレイス研究会理事長）「サードプレイスを創ろ♫」 1

特集 「むすぶ」

人と人を結ぶ場所（松江市） 2

和結び　～家族の絆を着物とともに～（松江市） 14

古都を結う新しき糸（松江市） 22

教えて！　怪談男児とえんむすび（松江市） 28

鉄の道で地域を結ぶ三江線

（江津市・川本町・邑南町・美郷町・安芸高田市・三次市） 34

夢が実を結べばそこが居場所になる　NPO 法人松江サードプレイス研究会（松江市） 44

編集後記 （裏表紙裏）

表紙題字　篠村優花（総合文化学科卒業生）

サードプレイスを創ろ♫

山下武之（ＮＰＯ法人松江サードプレイス研究会　理事長）

山下武之
1945 年生まれ（76 歳）
三重県津市出身
NPO 法人松江サードプレイス研究会
理事長

■サードプレイス知ってるかい？

みんなは、「サードプレイス」という言葉を知ってますか。最近、よく使われるようになってきました。「サードプレイス」は、「居場所」のことです。ぼくたち、松江サードプレイス研究会は、人が生きていく中で、サードプレイスを持つことがとても大切だと思っています。

「サードプレイス」は第三の場所です。では、第一、第二はなんだろう。もうわかりますね。第一は「家、家族」です。第二は「学校、職場」ですね。その間にある、第三の場所。これを見つけていこう、という活動です。

■県大生のサードプレイス

活動を紹介しましょう。皆さんの足元、島根県立大学人間文化学部生7人のサードプレイスです。

はじまりは２０１８年６月５日の、地域文化学科の専門基幹科目「まちづくりと協働」からでした。

ぼくは、竹田茉那先生の授業で講演。話の終わりに、昭和時代に生まれ育ったぼくたちが後世に残す「もの」として、松江出身の漫画家・園山俊二を取り上げました。「皆さんも園山さんをテーマに、一緒に活動しましょう」、そう提案しました。

60人くらいの受講生のなかから、7人の参加希望がありました。先生の理解と協力の下、その年の7月には、第1回のミーティングを開きました。それから、7人の自主的な活動が始まりました。園山さんの人となりと作品を研究していく中で、演劇「園山俊二物語」を創作。そして、コロナ禍の２０２０年３月に公演。地元ケーブルビジョン「マーブル」で放映されました。

これまでに、ミーティング・編集会議・練習・公演は、50回を超えました。ぼくが驚いたのは、各地から県大に来た1年生が4年間、ひとりも欠けることなく続いてきたことです。今年4月、就職で離ればなれになるでしょう。この4年間、園山俊二プロジェクトは、彼女たちにとっての、サードプレイスだったでしょう。このつながりは、卒業してからも続くかもしれませんね。

■ぼくたちのサードプレイス

ぼくたちは、京店商店街の中に、「サードプレイス倶楽部」という「場」を持ちました。バーカウンターもあるし、ミーティングスペースもあります。ここは、会員が、自分のおもいや夢を実現させる「場」です。

二人の会員の活動を紹介しましょう。一人は、勝田幸利会員。これまで好きで集めた品々を、気に入ってくれた人に引き継いでもらいたいと思う人たちとともに「おたから市」を開催しています。これは「終活」でもあり、モノを大切にしていこうとする「ＳＤＧｓ」の気持ちでもありますね。

もう一人は、金森金好会員。永年の夢だった「ＣＡＦＥ」。その夢に挑戦しています。珈琲好きから、一度はお客さんに自分の淹れた珈琲を飲んでもらいたい。毎週金曜日から三日間の「ＣＡＦＥ」です。メインはご自慢の珈琲とホットサンド。これには、奥さんの理解と協力があってのことですね（笑）。

■みんな集まってサードプレイス

グループでの活動もあります。市内の旧田野医院にあったチェコ製ピアノ「ノヴィー」の復元、そして、はつらつと活動を繰り広げるノヴィー・プロジェクトの皆さん。はじめは、松江城山公園内の興雲閣に設置。今年、旧大谷小学校に移動。地元の演奏家を中心に、活動しています。

■サードプレイスは様々

人によって「サードプレイス」は様々です。いつもの呑み仲間が集まる居酒屋、学生時代からの演奏している音楽の集まり、いくつになっても続けるスポーツ仲間等々。

その「場」を持っていることによって、生きていることが楽しく、明るく、元気になれば、それはなんでもいいんです。一人でもいいし。仲間と一緒にやってもいいんです。

「場」は、一つでなくて、たくさん持っていてもいいんです。

■第一、第二も大切にね♫

コロナ禍、2年間の短大生活の中で、「サードプレイス」を創っていくことは、むずかしいことかもしれないね。でも挑戦してみることが大切。そんなに大仰にならず、気楽に入っていくことも大切。いくつになってもサードプレイスは大切。

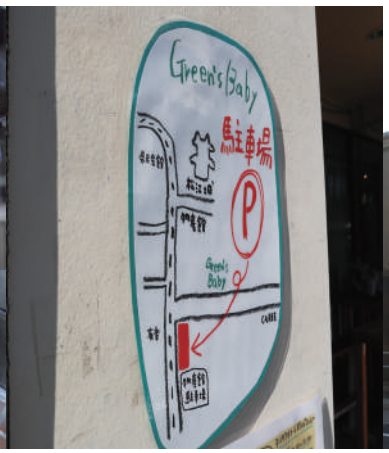
最後に、「サードプレイス」を持つことを薦めていますが、前提にある「ファーストプレイス」（家、家庭）と、「セカンドプレイス」（学校）を大切にすることを忘れてはいけないね。

特集「むすぶ」

人と人を結ぶ場所

（松江市）

佐々木里奈



11月15日、松江市殿町にある多国籍料理店「Green's Baby」のオーナーであり、朝や夜に市が開催される「殿町 Park Market」の主催者でもある、柏井雅さんに取材をさせていただきました。

「Green's Baby」のはじまり

柏井さんはGreen's Babyを始める前に一度BARを経営しておられました。しかし、BARの場所が人通りの多いところではなく、県外や海外の方はあまり来店されなかったとのこと。観光客の方が歩いてくることができるような場所にしたいと考えておられた柏井さんは、5年間BARを経営された後、現在のGreen's Babyの場所に移動されたそうです。また、現在のお店は地元の方と観光客のどちらも来てもらうことができ、お互いが交われるような場所にしたいと考えておられるそうです。そのため、人が集まれるような場をこだわって作っておられることがわかりました。

Green's Babyを松江で始められたきっかけは、柏井さん自身がおもしろいと思えるお店を作る、柏井さんの出身地である松江市であれば人や町の変化がわかりやすい、という考えだったそうです。

お店に来られる方々

お店には、10代の学生、20代から上の社会人や70代のおじいさんおばあさんなど、幅広い年代の方が来られます。客層を絞らないことが柏井さんのこだわりポイントと言われました。また、柏井さんの目標は、今のように幅広い年代の方が出入りする場所を維持すること。この場所で人が出会って、それが何かのきっかけになるといい。柏井さん自身が何かすることより、この場所があるから、誰かと誰かが出会える。そんな場所づくりが、柏井さんの目指すところ。「Green's Baby」のはじまりでも述べたように、場にこだわっておられることがわかりました。幅広い年代の方が来られるため、違う年代の方々の繋がりのきっかけができたらいいなとも考えておられるそうです。「きっかけづくり」も一つのキーワードのようです。

料理について

グリーンカレーをはじめとする多国籍料理を扱っているGreen's Baby。料理は柏井さん自身がその国で美味しいと思った料理を作っておられるそうです。また、柏井さんは多国籍料理を本場さながらに本格的に調理するのではなく、日本の方向けにアレンジして提供しておられるとのこと。実際に文化情報誌制作を受講している学生と先生、筆者の5名で料理を食べに行きました。筆者は、メキシコを代表する料理の一つのタコスを食べました。取材のときに「この料理を食べてその料理の国に実際に行ってみたいと思えるような料理を提供している」と柏井さんが言っておられましたが、たしかに、今まで行きたいと一度も思ったことがなかったメキシコに行って本場のタコスを食べてみたいと思いました。

多国籍料理のほかに、彩りが綺麗なサラダもありました。サラダはGreen's Babyのおすすめの一つです。多国籍料理だけではなくサラダを取り入れた理由も柏井さんに伺いました。お昼の食事メインが多国籍料理だけだとお客さんが偏ってしまう。また、料理の幅が狭いと感じたとのこと。実際にサラダを取り入れたことによりベジタリアンに対応でき、さらにベジタリアンにも対応できるお店が島根には少ないため評価が高いこともわかりました。ベジタリアンだけでなくビーガンの方からも評価が高いようです。

野菜について

サラダで使われている野菜についても伺いました。野菜は地元野菜を使っているのか伺ったところ、地元の有機野菜を使うのが理想ではあるが、料理の彩り重視で野菜を決めるため、地元だけでなく国内産のものや、海外産のものを使うことがあるとのことでした。地元の有機野菜でも野菜を仕入れているところは特に契約はしておらず、ＪＡで購入することもあればマーケットで購入することもあるそうです。

「殿町Park Market」

Green's Babyのオーナーである柏井さんは、不定期で開催される「殿町Park Market」も主催しておられます。殿町Park Marketは朝だけでなく夜に開かれることもあり、多くの人で賑わっているようです。筆者はまだ一度も行ったことはありませんがこのインタビューを機に次に開かれた際には行ってみたいと思っています。殿町Park Marketを始めたきっかけは、市場を開く駐車場を借りることができるようになったことだそうです。駐車場を借りる以前からお店の中でマーケット自体はしていたそうで、古着などを売っていたとのことです。また、マーケットの内容は毎回異なっていたそうです。殿町Park Marketを開いて良かったと思われたことは、コロナ禍でもお客さんが来ることができることや世界の朝ご飯を食べることができること。また、世界の朝ご飯を食べることにより、知らない食べ物を食べることができる機会になることも、殿町Park Marketの良いところであるとのことです。現在コロナ禍によりなかなか海外に出かけてその土地の有名なものを食べることができない状況ですが、こうして地元で多くの世界の料理を食べることができることは素敵だなと思いました。

柏井さんには、Green's Babyと同じように、いろいろな世代が繋がる場所になればいいなという想いもあるそうです。

毎回同じように開くのではなく、場所や人、テーマを変えて開催されています。柏井さん自身、人や内容が変化していくほうがおもしろく、その時々の状況に合わせて考えることが好きと言われていました。そのため、朝だけでなく夜に開催することもあり、ただ並んで出店するだけでなく食べ物をかごに入れて売り歩く工夫もされているそうです。その他にも、殿町だけで開催するのではなく、宍道で開催したこともあったとのこと。今後は筆者の地元である大東でも開催することを考えておられるとのことなので、開催されたときには友達や家族を誘って行こうと思っています。殿町以外での開催には、その地域の方と一緒にやることで、ノウハウを共有し、きっかけを持ってもらえれば、という想いもあるのでした。市場のテーマも毎回異なっており、テーマの内容によって開催する頻度を考えておられるそうです。テーマを考え、テーマが面白いと感じたときは月に2回開催する、テーマが思いつかないというときは2～3か月に1回など、開催は不定期だそうです。

殿町Park Marketに出店しておられる方は、柏井さん自身が思っている空気感を作ってくれるような方を集めておられるとのこと。一番はじめのメンバーは柏井さんが決めており、5、6店舗は固定だったそうです。現在は開催するまでに出会った方を誘うこともあるそうです。中には、広島などの県外の方が自分も出店したいと声を掛けられることも。県外の方も殿町Park Marketを知っているのは、市場に来た方がインスタグラムやツイッターなどのＳＮＳで購入した食べ物や商品を投稿し、その投稿が県外の方に見られて県外の方が殿町Park Marketの存在を知る、ということのよう。出店者については、誰が来るなどの情報は事前に発表しないようにしておられるそうです。もし人気なお店が来てそこにばかり人が集まってしまうのはよくないという理由もあり、人気なお店が来るとしても、いつもと変わらない感じで告知されています。

出店の内容も様々であり子供も出店できるものがあることも魅力だと感じました。また、出店者の中には副業や趣味で物を作り、趣味を売り物にしてみたいと考え出店されている方も多くおられるそうです。

キリンビール
GAMBO

チキン
MEXICO

みかん

サラダ
¥500
DESSET

Shimane Ice
Shimane Ice
Shimane Ice

料理

タコス

タコライス

ガパオライス

ゲストハウスについて

柏井さんはGreen's Baby、殿町Park Marketだけでなくゲストハウスも経営されています。ゲストハウス「KITATONO」は、Green's Babyの前の道を挟んだはす向かいで近くにあり、何かあったらスタッフの方がすぐに駆け付けることができます。しかし、スタッフの方がすぐ行ける距離で、観光客が来やすい場所がなかなか見つからず、場所を見つけるのに苦労されたそうです。

どのようなゲストハウスにしたいかを伺ったところ、見知らぬ観光客同士が交える場所で、観光客だけでなく地元の人も気軽に来ることができるような場所にしたいとのことでした。柏井さんは人と人との繋がりを大事にされていることを改めて感じました。また、柏井さんは、ここにもう一度訪れたい、ここに住んでみたいと思われる町のファンを増やすことも目標にしておられるそうです。ゲストハウスを実際に見せてもらったとき、下にはソファーの置かれたリビングがあり、ここでゲスト同士が気軽に話すことができて、繋がれるきっかけになると思いました。柏井さんも、ゲストハウスやBARは、金銭的に安いため地元の人が観光客とも話せる場所になると言われていました。

ゲストハウスを利用される方についても伺いました。地元の人が利用されるパターンは、山間部の人が雪で帰ることが

できないとき、隠岐の人が利用されるときなどでした。また、どのくらいの年代の方が利用されるのかについては、20代後半から60代の方まで幅広い年代の方が利用されているようです。その中には、宿代を安くして観光で美味しいものを食べたいという考えで利用される方もいるとのことです。

飲食店、マーケット、ゲストハウスは、色々な年齢層が集まって繋がることができる良い機会であるため、いずれも学生向けや大人向けなどのターゲットは決めておられないそうです。

コロナ禍において

コロナ禍についても伺いました。柏井さんは殿町 Park Market で業者関係なくどうやってお店の売り上げを上げたらいいかなど話すのがおもしろいと言われ、コロナ禍による変化も楽しんでおられるそうです。活動については、市内のスーパーマーケットでお弁当を売るというテイクアウトもしておられました。ゲストハウスでは、コロナ禍により旅行に行けない親子連れが泊まりに来ることもあったそうです。

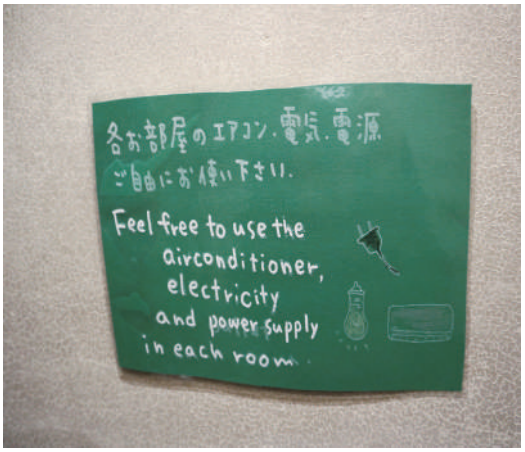
柏井さんの1日スケジュール

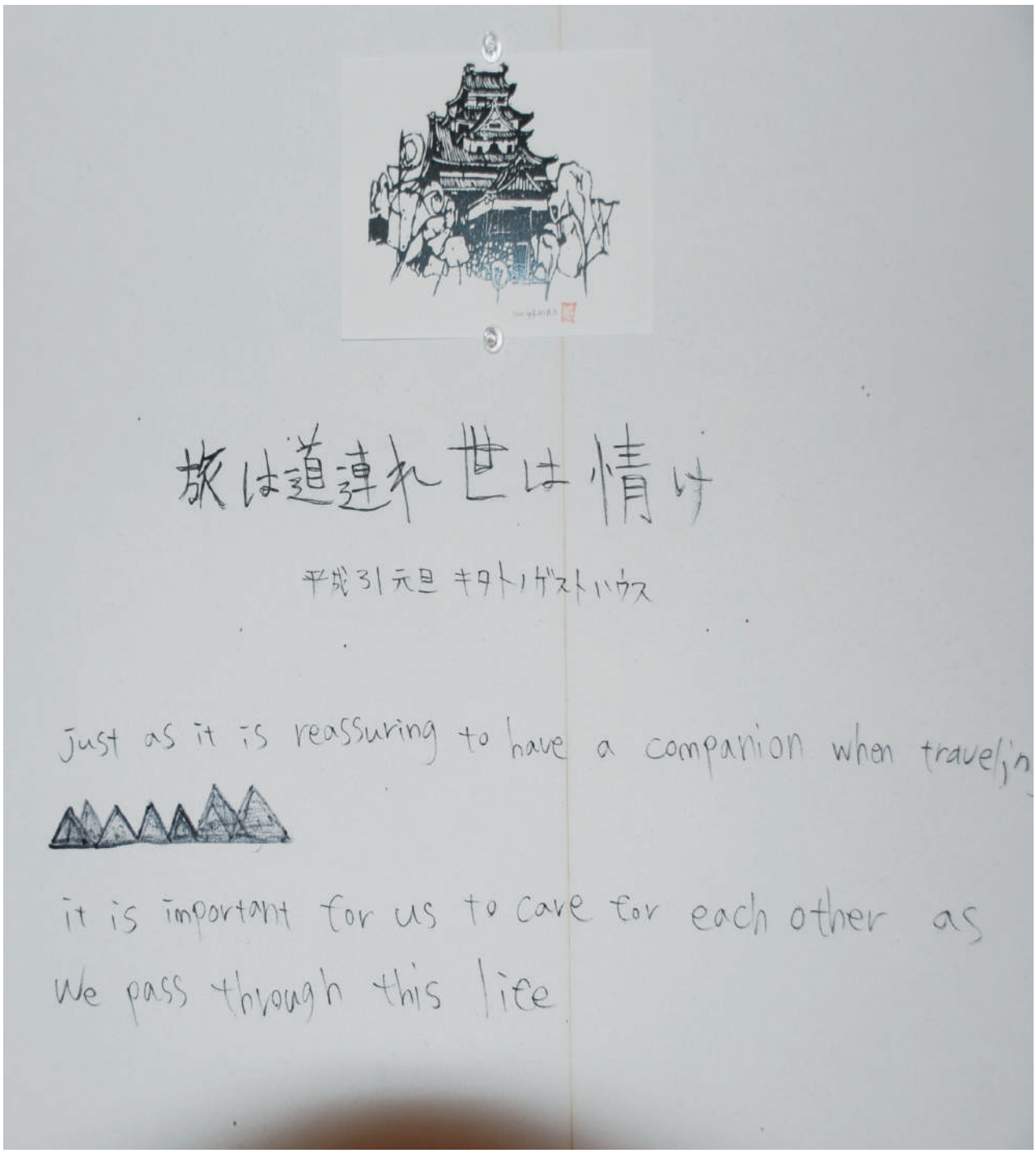
最後に、柏井さんの1日のスケジュールについて伺いました。6時に起床し8時に市内のマーケットで食材の仕入れをし、8時半から16時、17時までお店で働いた後ゲストハウスのチェックイン確認へ。18時には帰宅をするという1日のスケジュールでした。売り上げによって夜にお店を開けることもあるそうです。また、柏井さん自身がやりたいことがあるときにはお店を開けることもあれば逆に閉めることもあるとのことでした。

取材に応じてくださる柏井さん

ゲストハウスの様子

ゲストハウス１Ｆのソファー





学校にあるような水道もありました！

フリーマーケット

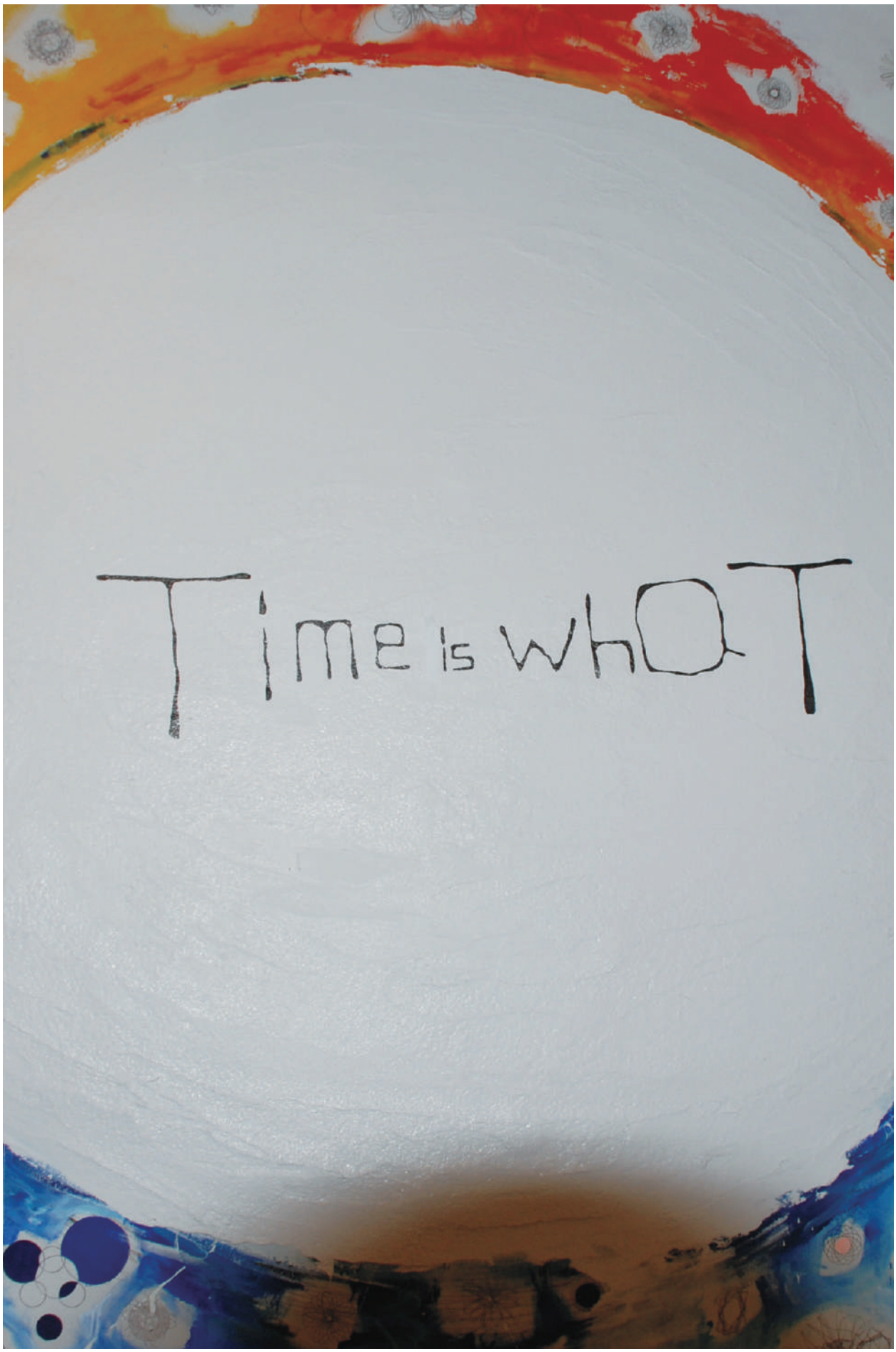
さらにお店を進んでいくとフリーマーケットもありました。

フリーマーケットの服も似合う山根先生

取材をしてみて

今回取材をしてみて、Green's Baby だけでなく殿町 Park Market やゲストハウス KITATONO の魅力についても多く知ることが出来ました。また、地元の方と観光客の方だけでなく、幅広い年代の方同士も繋がることが出来る場所づくり、きっかけづくりを大事にされていることが取材をする中で印象に残り、とても素敵だなと感じました。筆者自身、松江の飲食店について詳しくなかったため、Green's Baby というお店があることを文化情報誌制作の授業で初めて知りました。お店の雰囲気、料理、柏井さんや従業員さんの雰囲気もとてもよく、授業ではなくプライベートでまたご飯に行きたいと思います。

（ささき　りな）


Time is whOT

和結び

～家族の絆を着物とともに～

（松江市）　谷本　誓

選ぶ前に知っておきたい
振袖の基本

◆作：谷本　誓

◆取材協力者の長岡君枝さん

成人式、それは二十歳を迎えた人たちの晴れ舞台。女性の皆さんは成人式に向けて振袖を選びますよね。今回、私が記事に書くのは成人式の楽しみでもある振袖選びについてです。

私の成人式で着る振袖は母が成人式の時に着た振袖です。そこで私は自身の振袖に合わせる帯・小物選びの体験を記事にしたいと思いました。今後、成人式を迎える方々のために少しでも助けになる記事になればと思い、取材をしました。

取材に協力してくださったのはきものギャラリー八重垣（代表取締役　宇垣修司さん）で働いている担当者の長岡君枝さんです。着物選びについて自身が気になることについての質問もさせて頂きました。

ところで、皆さん成人式の振袖選びについてご存知でしょうか。「振袖と帯を選ぶだけではないの？」と思っている方もいるのではないでしょうか。実はそれ以上に選ぶものがあるのです。

上のイラストをご覧ください。成人式の振袖は着物・帯の他にも半衿・伊達衿・帯揚げ・帯締め・髪飾り・バッグとこのようにたくさんの品々を選ぶ必要があるのです。

では、これらのものをどのようにして選んでいくのでしょうか。

帯

◆母の着物に袖を通します。

◆簡単な衿を着用。

◆袖で「お端折り」をつくっています。

◆帯の幅が広く違和感がある様子。

11月7日、私は母と先生と3人で、ものギャラリー八重垣を訪れました。着物に合わせる帯と小物を選ぶためです。

簡単な衿などを身に付け着物を羽織ったらスタートです。

はじめに選んだのは帯です。着物の次に重要な帯は存在感があります。私は以前から帯について、白や銀の帯が良いと母に話していました。それは私の肌の色に合うものが良いと思ったからです。母が成人式で着た時、帯の色は金色だったと聞きました。母は私の要望を聞き、帯を選んでくれていました。帯の付け始めは少し違和感がありました。余り合っていないのではないかと考え始め、もっと白いものが良いと話しました。しかし、他の帯を見てみると金色の帯が多く見受けられ悩んでいた時、長岡さんが着物の袖を使って「お端折り」をつくり、本来の帯が見える幅まで隠してくれました。すると私が感じていた違和感がなくなったのです。付け始めたときは帯の幅が広く存在感が強すぎていたことがわかりました。

衿

◆黄緑の伊達衿

◆様々な色の伊達衿があります。

◆紫の伊達衿

◆金の刺繍入り半衿

◆２日目の取材で撮らせていただいた半衿。白以外の色もあるようです。

次に決めたのは衿です。衿は二種類あります。顔に一番近い半襟、その次に半襟と着物の境にある伊達衿（重ね衿）です。伊達衿（重ね衿）は色が鮮やかなものが多くありました。たくさんの色があって悩んでいた時、母と長岡さんが二人そろって言ったのが「着物に使われている色を選べばまとまる」ということでした。それを考えると紫と黄緑の伊達衿（重ね衿）の二つに絞ることができました。二つを当ててみると印象が全く違います。紫はとても華やかに見え、黄緑は優しい印象を与えてくれます。私は着物の印象から優しい雰囲気が良いのではないかと思い、黄緑色に決めました。

半衿は現在、様々な刺繍が施されているものが多くあるようです。母の世代では半衿は白色が主流で、刺繍が施されているものは見たことがなかったと言っていました。本来、礼装では半衿は白がしきたりだそうです。そのため、きものギャラリー八重垣では刺繍衿は白のものをすすめているそうです。私が選んだのは金色の花柄の刺繍が入ったものでした。今まで選んだものを見てみると落ち着いたものが多かったので、半衿に金色を入れることで上品かつ華やかさを加えることができたと思います。半衿には他にも種類があり、七宝柄や桜の柄などがありました。

帯揚げ・帯締め

◆平らな帯締めお試し中・・・。

◆何色にするのか検討しています。

◆帯になじむ白にしました。

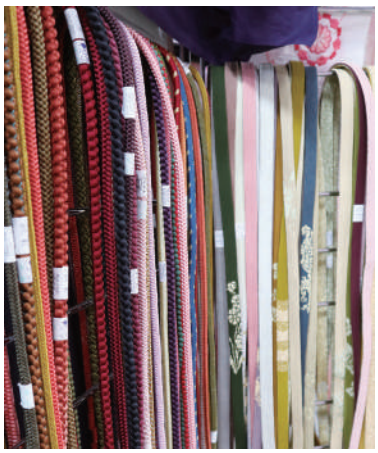
◆帯揚げの柄が主張しすぎているようです。

衿の次は帯締めと帯揚げです。帯締めについては、私の場合すごく悩みました。今まで選んできたものはどれも優しい色味のものが多かったからです。帯締めは飾りのように結べるものもあればシンプルなものもあるのでどちらを選ぶか迷いました。はじめは飾りのような帯締めを当ててみたものの何か違うと思い、シンプルでやわらかい色合いのものも試してみました。しかし、やわらかい色合いだと全体的にぼやけてしまう印象が見受けられました。そこから私は着物に入っている色で伊達襟の時に選択肢としてあった紫色を選びました。

帯揚げではじめに当てたのが黄緑色に赤い花の刺繍が施されたものでした。ですが、刺繍が浮いてしまって着物の印象と合わないと思っていたところ長岡さんも同じことを思ったみたいでした。柄のない無地の物を選んでいたのですが、伊達襟と同じく黄緑色を当ててみても主張しすぎているような気がしました。そこで選んだのが白い帯揚げでした。帯が白いため主張させず同化させることによってまとまりがある印象になりました。

ここまで衿と帯締め、帯揚げを決めていきました。私はそれぞれ別々の色を選びましたが、礼装では伊達衿（重ね衿）と帯揚げ、帯締めの色は統一するのがしきたりだそうです。しかし、現代ではネットなどの普及によりそのしきたりが変わり始めていることがわかりました。

あなたに似合う色を



着物や帯、小物選びについて担当者である長岡さんに質問させていただきました。

着物に合わせるものを決めるときは全体のバランスを見ることが大切だそうです。それぞれの品物が良いものでも合わせてみるとまとまりが無い印象になってしまいます。そのため、色合わせが着物を選ぶときの秘訣になるようです。

また、肌の色も色合わせの際に重要だそうです。長年勤めている人はお客様の肌の色やパッと見た雰囲気で似合う着物がわかる人もいるそうです。長岡さんによると私たちのような学生は自分に似合う色がわからない人が多いとのこと。最近はパーソナルカラー診断など、肌によって似合う色を知ることができます。自分の肌の色に似合う色を少しでも知っていれば選ぶ際に助けになるでしょう。しかし、肌の色と希望していた色が合わないのではないかと考えてしまう方もおられるかもしれません。ですが、一つの色でも種類がたくさんあります。例えば、赤色といっても暗い臙脂色やオレンジがかった朱赤など様々な色がありますよね。その中から自分の肌に合った色を選ぶことができるので選択肢はたくさんあります。

きものギャラリー八重垣では着物の色がわからないお客様には五着程度の色や柄の違う着物を選んで、またその中から絞り込んでいって、お客様がどのような着物を求めているのかを引き出していくようです。

色を決めるとき自分をどのように見せたいかで決めるのもいいかもしれません。簡単にですが八重垣さんにそれぞれの色に対する印象を教えて頂きました。

黒は大人っぽくなりたい方にぴったりです。強さや重厚さを感じさせ、高級感を漂わせます。

赤は明るさや優しさを感じさせます。女の子と言えばこの色と思う方が多いかもしれません。八重垣さんによると山陰地方では赤の古典柄の振袖が人気だそうです。

ピンクは若々しさを感じさせる色です。やわらかさを表現しているため優しい印象を与えてくれます。

緑は暖色が持つ穏やかさや優しさと寒色が持つ知的な印象を与えてくれるのが特徴です。

白は清潔感を感じさせる色で、汚してはいけない大切なものを感じさせます。

黄は明るい気持ちにさせる色で元気でポップな印象を与えてくれます。

青は世界的にも人気の色だそうで、落ち着いた印象を与えることができます。

それぞれの色は明暗や濃淡によっても印象を変えることができるので様々な色を試してなりたい自分になれる色を探してみてください。

家族の絆を結ぶ ママ振り

◆母と話し合いながら決めていきます。

◆振袖の全体像

◆２日目の取材

今回、私は成人式で母の着物を着るので「ママ振り」についても聞いてみました。

八重垣さんでは母や姉の振袖を再デビューさせるプラン「ママ振り」があります。日常的に着物の寸法などを直していたため、７、８年前に問い合わせが来るようになり、自然の流れでできたプランだそうです。身内の着物を着るために帯や小物を買う人が25％、そのまま着る人が10パーセントいるそうです。

「ママ振り」は現代に同じ柄が存在することが少なく、個性的なことが特徴です。現代の着物は化学染料が使われているものが多く、はっきりとした鮮やかな色が特徴ですが、「ママ振り」の多くは昔ながらの自然な染料を使用しています。そして、職人が手掛けているため現代に作られた着物よりも高額なものが多いようです。

現代ではレンタルをする人も増えており、値段はリーズナブルなものが増えているとしても着物を買う人はなかなか少なくなっているそう。また、着物を買わない理由として、着物の管理に自信がないという意見もあるといいます。普通の衣服とは違い、洗濯もできないためクリーニングに出す必要がありますし、湿気を溜めないようにしたり、樟脳を使って防虫対策をしたりと気を配らないといけません。担当者の長岡さんは、母の着物は保管をしっかりと行っていたからこそ30年がたった今でも着ることができるのだと教えてくれました。

◆きものギャラリー八重垣　松江店外観

◆３日目の取材

私は今回の体験で、着物は家族の絆を結んでくれるものだと実感しました。着物は一般の服とは違って手入れをしっかりしていれば長く使うことができます。母から聞きましたが、母の着物は曾祖母と祖母、そして母の三人で決めた着物だそうです。そう考えるとこの着物は私たち家族の絆を結び、繋いでくれるのではないでしょうか。

今回、帯選びや小物選びを体験して思いました。やはり、母はよく私のことを見ていると。考えてみると帯を選んでくれたのも母ですし、髪飾りも私の好みをすぐに当てていたからです。もしかしたら、みなさんもご家族の意見を聞いてみると良いかもしれません。案外、自分が把握していない好みを身近な人が引き出してくれるかもしれませんよ。

（たにもと　ちか）

古都を結ぶ新しき糸

（松江市）

古き良き文化が今もなお残り、多くの伝統文化が息づく街、松江。
そんな松江を舞台に、「新しい文化」の発信を行っている人々がいます。
今回は、松江の知名度上昇や定住促進のために魅力発信を行っている
クリエイターの方々に、松江と新しい文化についてお話を伺いました。

鈴木彩女

今回お話を伺ったのは3人。皆さんそれぞれにジャンルの違うクリエイターとして活動されています。インタビュアーである私もまた、松江を舞台に作品制作を行っており、同じクリエイターの視点で、松江と新しい文化についての興味深いお話を伺うことが出来ました。

まず、最初の1人は2人組の〝企描く〟ユニット「ヘイソン・ニャー」として、企画やイラスト制作などを行われているヘイ子さん。島根大学への進学を機に松江へ移住され、その後米子での就職が決まったことで、松江に住み続けることを決意されました。クリエイターとしての活動を始められた理由は、なんと「暇に耐えきれなかったから」。結婚し、専業主婦をしていたというヘイ子さんは、趣味で本を出版。そこから現在のお仕事につながっていったとのことです。

2人目は、松江市の地域おこし協力隊、そして声優による怪談朗読会「酒林堂」の制作スタッフとして活動されている北えりかさん。社会人生活ののち、やりたいことをやってみたい！と演劇の養成所へ。声優としての活動もされており、その縁で酒林堂の手伝いをするように。その後、だんだんと制作スタッフに加わるようになったといいます。酒林堂が松江で公演を行ったことをきっかけに松江に興味をもち、移住を決意されました。現在は地域おこし協力隊として活動しながら、酒林堂の「松江支部」として朗読会の運営に携わっています。

最後に、3人目が松江市のVtuber観光大使をつとめるちぃさん。松江に来る前はずっと京都に居たそう。所属するIT企業経由で参加したVtuberの講演会がきっかけで、代表からVtuberとしての発信活動に抜擢。講演会の翌々日ごろまでにすべて機材などが用意され、YouTubeについての知識が全くなかったところから、準備期間3日でデビューを果たしました。松江市の観光地についてなどの動画を発信し、松江市民だけでなく、県外の方からも視聴されています。

観光大使としての活動は、なんとご自分から市長に「観光大使がやりたいです」とお願いしたそう。

▲興雲閣にてインタビューの様子。
左から、北さん、ヘイ子さん、インタビュアー。

簡単な自己紹介を終え、まずは「松江に住み続ける理由」について伺いました。「色々あるけど大きな部分はご縁だと思う」と、ヘイ子さん。「様々な偶然が重なってここにいる。それこそが理由かもしれない」と話します。確かに、松江に限らずこの出雲地方では「ご縁」というワードは街中のいたるところで見ることが出来ます。これには全員が頷き、この地域での「ご縁」が結ばれる力、というものの強さを実感しました。

また、ちぃさんは「京都にいたころは観光大使なんてなれなかった。でも、松江に来て観光大使になって、生活がガラッと変わった」と言います。松江は、やはり人と人との近さが強みなのではないかと感じるが、自分のちょっとした行動で状況が簡単に変えてしまえる、そんなコンパクトさこそ、何か新しいことを始めたいと思っている人には大きなメリットなのではないでしょうか。

しかし、県外出身者から見ると、この松江で暮らすうえで困ることも存在することが分かりました。全員が口をそろえて言うのは「車移動」の話。松江で暮らすうえで、移動手段として車の存在は不可欠です。しかし、古い町並みが残っていること、まだ整備が行き届いていない道路が存在していることなどから、運転の難易度が他の地域と比べて高いと感じるのだといいます。

例えば、松江城の城下町近辺は、今でも昔のままの道の形を守ったまま、現代に適応した形に整備されています。ヘイ子さん曰く、そういった古い道を運転しづらいと感じる知り合いが多くいるのだそう。ちぃさんや北さんもまた、整備の行き届いていない道路に困らされたことがあるそうです。

城下町付近の道は、江戸時代からの名残で「鉤型路」と呼ばれる変則的な十字路が多く存在します。地元の人々はそれに慣れていますが、そうではない人はどうしても戸惑ってしまう。しかし、来たばかりであればそれを教えてくれる人はいない。

ただし、そういった鉤型十字路のような地形は、歴史を知ることで「面白い」に変わるのではないかとヘイ子さんは話します。こういった古い道は、どこにでも残っているわけではない。城下町がそのままの形で残っているがゆえに、江戸時代当時の「攻めにくさ」を重視した道のつくりを生活の中で実感することが出来る。こういった特徴は、地元の人々だけで共有するのではなく、もっと大々的に発信することで県外者に対して不安を取り除くことにもなるし、興味を持ってもらえる可能性が生まれるのではないでしょうか。

▲興雲閣にてインタビューの様子。
インタビューは、亀田山喫茶室にて行われた。写真は名刺交換後の様子。

メリット・デメリットが存在するのは、「暮らす」という分野だけではありません。様々な発信活動を松江で行っていくうえでも、そこにはメリットとデメリットが存在していました。

発信活動を行ううえで大きいと感じているものとして全員が賛同したのは、やはりこの地方の持つ「ご縁」の力です。というのも、先述した通りコンパクトな街であるためか、人と人との距離が大変近い。それ故に、知り合いなどに「こういうことがしたい」と話すと、協力してくれそうな人だったり、関係者だったりを紹介してもらえることがよくあるといいます。

「居酒屋で隣の席に座った方が企業の方で、その場で取材の申し込みをしたところOKを貰うことが出来た」というエピソードを語ってくれたのはちぃさん。話の流れで自らの行っている動画での発信活動について話したところ、見学と取材の許可を得たといいます。偶然の出会いがこういった繋がりへと発展していくこともあるようです。

しかし、こういった繋がりの強さには、デメリットも存在します。

クリエイターとしての活動をするにあたり、「名前」に関する問題というのはついて回ります。人前に出る以上、本名を出すことはリスクを伴うことも事実。しかし、松江のようにコンパクトで古い文化の残る街では、そういった事情が理解されないことも多くあります。

北さんは、地域おこし協力隊になる段階では普段使っている芸名の使用を考えていましたが、市の管轄ということもあり、登録は本名でせざるを得なかったそう。そのため、現在は芸名と本名の2つが存在してしまっている状況です。この件については私にも心当たりがありました。取材等を受ける際、学校の名前を出す関係もあり「できれば本名で紹介したい」と言われることは多くあり、そこには葛藤も存在しました。こういった古い考え方や理解のされなさは、クリエイターとして活動していくうえでネックになる部分だと感じます。

▲ Vtuber 観光大使のちぃさん。

▲インタビュー後、興雲閣付近からの松江城の眺め。
松江にしてはめずらしく晴天だった。

最後に、「新しい文化」を受け取る主な世代である若い世代に向けての発信方法について意見を伺いました。

Vtuberとして活動しているちぃさんは、自分のチャンネルを見てくれている人の多くは意外にも年上の世代が多いのだと話します。バーチャルな姿での発信という形態は比較的若者向けのように感じていましたが、そうとも限らないようです。つまり、媒体を変えただけでは若い世代――次世代を担う新しい世代に届けることは出来ないということ。

会話の中で出たのは、松江における若者と年上の世代の隔絶でした。

まず、共通した感覚としてあったのは、この地方の年上世代の閉鎖的なコミュニティです。皆さんが県外から来ていることもあり話題に上がったのは、まず二言目には「どこから来たのか」を聞かれるということでした。どれだけ長く松江に暮らしていようと、真に地元の人々同士のコミュニティには参加することは難しいのかもしれません。そして、年上世代により強くそういった風潮を感じます。

ヘイ子さん曰く、この地方の年上世代は「Facebook」を利用している率が高いように感じるそう。やはり、人と人との関わりが強い分、本名でつながるFacebookは人気のようです。心理として、TwitterやInstagramのように「知らない人」と繋がることを楽しむのではなく、「知っている人」同士でつながり、情報共有を行うことを好むのではないでしょうか。しかし、若者世代のFacebook利用率はさほど高くありません。そのため、年上世代のみで情報が回り、若者世代にはそれが届かず、取りこぼされてしまうという問題が発生してしまいます。

恐らく、Facebookなどで狭いコミュニティでの情報拡散を狙った方が、より多くの人に伝えることは出来るのでしょう。しかし、そうすると肝心の若者世代には情報が行き届かなくなってしまうのです。

北さんは、この問題について、「子供に対して話をしたい」と言います。酒林堂の公演は、「怪談と日本酒」というテーマもあり、基本的に大人向けの朗読会。そのため、例えば小泉八雲の作品を発信したとしても、子供たちにはそれを届けることが出来ない。大人だけではなく、子供たちにも聞いてほしいが、その場所がないのだと話します。

先述したように、松江の大きな問題点として、大人たちと若者世代の情報の隔

▲取材会場となった興雲閣。

場所を提供してくださった亀田山喫茶室さま、ありがとうございました。

絶というものは確実に存在しているように思えます。それを解決する糸口こそ、小中学生などの子供たちに、大人側から情報提供を行っていくことにあるのかもしれません。

狭いコミュニティに関しての問題点は他にもあります。

つながりが強い分、どうしても生まれてしまう「身内感」には困った経験があるとちぃさんが話します。取材の許可一つとっても、知り合い同士などの場合だとその場の雰囲気であやふやなままになってしまうことが多いと感じるそうです。そのため、自分が取材をする場合は、許可などはきちんと正式に取り、お願いすることを心掛けているとのこと。

北さんやヘイ子さんも、許可なしにSNSなどに写真を載せられたり、秘密にしておきたい情報を他人に話されてしまったり、といったことを経験したそうです。人同士の距離が近い分、情報の伝達は早く、簡単にされてしまう。イメージを守るために秘匿する情報があることの多いクリエイターには、少し厄介な特性かもしれません。

このように、松江で創作活動を行うことには「人と人とのつながり」が大きな力を持つ、ということが分かりました。その力をどう使いこなすかは各々にかかっていますが、使いこなすことさえできれば自分が考えてもいなかったような物事を実現することが出来るかもしれません。

そして、全員が言っていたのは、松江市民の「謙遜」について。県外出身者から見ると、良いところがたくさんあるにもかかわらず、彼らは「そんなことないですよ」と返しがちだといいます。しかし、こういった外からの目で見た魅力こそ、松江という町の魅力のアピールのカギになるのではないでしょうか。

改めて、この松江の町は、文化的な活動をするうえでとても大きなパワーを持ち、クリエイターにとって追い風となれる可能性を秘めていると感じました。松江の持つ文化力を発信していくためにも、クリエイターにやさしい街づくりというものを目指していくのもよいのではないかと感じます。次世代の小泉八雲がいつか生まれることを願いながら。

（すずき　あやめ）

教えて！怪談男児とえんむすび

県大発！松江の魅力を発信するために始動したキャラクタープロジェクト「怪談男児御伽草紙」。怪男プロジェクトにて活動する４人の「怪談男児」たちへの独占インタビューをお届けします！

鈴木彩女

怪談男児御伽草紙

とは……？

島根県立大学キラキラドリームプロジェクトから生まれた、松江に伝わる怪談を擬人化した４人の美少年キャラクターが、松江の観光施設やお土産、お店などを紹介するキャラクタープロジェクト。SNS などを通じて、キャラクターたちが様々な情報を発信します！

▲公式 HP

▲公式 Twitter

城山稲荷神社の狐

小豆とぎ橋

月照寺の大亀

◀インタビューは次のページから！

白珠玉

――それではまず、自己紹介をお願いします。

は、はいっ！城山稲荷神社の神使狐阿形、白珠玉です！お社のお手伝いと、松江の街を守るためのお仕事、妖怪や幽霊が原因の事件の解決をしてて、えっとあと…好きな食べ物はいちご大福で、好きな色は赤です！

――あまり緊張なさらないでリラックスしてお答えくださいね。

がんばります！……ん？がんばるとリラックスではない？かな？なんかそれっぽくがんばります！

――ではそれっぽくよろしくお願いします（笑）。では早速、この場所との関わりを教えてください。

えと、神使の学校を卒業した後、去年から新しく赴任してきました。今は相棒と一緒に神使のお仕事をしています！……たまに見に来てくれる先輩からは怒られてばっかりなんだけど……。実は、おれ遺伝でほかの狐より妖力の保有量が多くって。まだコントロールがへたくそなんです。これでもマシにはなったんだけど、どうしても失敗しちゃうことが多いんですよねー……。前なんか、回収した絵馬ぶちまけちゃって、こっぴどく怒られたことあって！

――遺伝なんですね。使いこなせたら心強いのでは？

はい！なので、今はとにかく力のセーブができるように練習してます。両親とも結構……いやかなり妖力が強いので、それが濃く出たらしくて……。だから、本当は普通の子たちが羨ましいな、ってのはよく思ってました。やっぱりなんか、出る杭は打たれるじゃないけど、これだけ強いと周りから浮いちゃって……。

――なるほど。学生時代は苦労されたんですね。

へへ、少しだけ……。でも、今は頼もしい相棒もいるし、友達もいろいろ助けてくれるし、すっごく楽しいです！お社の狐穴に二人で住んでるんですけど、いつもの四人で集まってご飯食べたり遊んだりするんです。なので、あの頃はつらいこともあったけど、今が楽しいから、まぁいっかー、って。

――それはよかったです。では、白珠玉さんの思う、城山稲荷神社の好きなところを教えてください。

好きなところ……そうだなぁ、おれにとっては安心できる場所、っていうのもあるんですけど、個人的にはお城のすこし奥まった場所にあるのが秘密の場所みたいでワクワクします。お城、国宝っていうこともあって足場が悪いところもあって、おれなんかよく滑って転んじゃうんですけど……そういうのも含めて秘密基地みたいでたのしいなーっておもいます！あと、鳥居が赤くてかっこいいから、好き……

――白珠玉さんらしい回答ですね（笑）。それでは最後に、白珠玉さんの将来の夢を教えてください。

夢は、立派な神使狐になって、たくさんの人を救うこと、かな。おれはこっちの世界に来てすごく救われたっていうか、今すごく楽しく過ごせてるのも、ここに生きてるみんなのおかげだなぁ、と思うので……みんなが信じてくれる分だけ、おれはおれで居られるな、って。だから、みんなから貰った分、恩返しがしたいです。あとは……毎日おいしいいちご大福が食べられるようになりたいです！

白珠玉

由緒正しい妖狐の名家の出身。両親ともに位の高い化け狐だが、未だに力を使いこなせずにいる落ちこぼれ。自分の美しい容姿には自信があるが、才能はないと思っているため時折自虐的になる。女性に対しては過剰なほど紳士的だが、積極的に来られると慌ててしまう。甘い和菓子が大好き。

黒魅津

――それではまず、自己紹介をお願いします。

城山稲荷神社の神使狐、吽形の黒魅津です。阿形の白珠玉と一緒に、城山稲荷神社の御祭神様にお仕えしています。それと、御祭神様からお任せいただいた松江の街の広報活動もみんなで頑張っています！

――黒魅津さんはずいぶんと落ち着いているんですね。

え？そうかしら……あ、確かにタマに比べたらそう見えるかも、です。あの子、すごく元気でしょう？だから、隣にいる僕がしっかり見ておいてあげなくちゃ、と思って。

――なるほど、まるで保護者さんですね（笑）。それでは、黒魅津さんとこの場所との関わりを教えてください。

はい。タマと同じく、神使としてお仕えしています。学校を卒業する前、僕は本当は黒狐が集まるお稲荷様のところに行こうかと思っていたんですけれど、タマが一緒にやらない？って誘ってくれて……当時は寮のお部屋が同じで、そのころから一番仲が良かったのでうれしかったです。それに、タマってものすごくいいお家の出身で……だから、野狐あがりの僕がタマと一緒でいいのかな、と思ってたから、タマからそう言ってもらったときは泣いちゃうかと思いました。

――ずいぶんと長いお付き合いなんですね。

はい！僕が拾われて学校に入ってからずっと一緒にいるので、今ではもうほぼ家族みたいなものかなって。神使としても一緒なので、今後も長く一緒にいることになると思います。

――白珠玉さんのことが大好きなんですね！

えへへ、そうですねぇ……！でも、お料理のセンスが壊滅的なところとか、お散歩に行くと木の枝とかどんぐりとか松ぼっくりとか拾ってきちゃうところは少し……何とかしてほしいなとは思います……僕は別に慣れてるからいいんですけれど、タマって虫が苦手なんです。なのに拾ってきちゃうでしょう？だから後から虫出てきて泣くんですよ……でも、そういうところが親しみやすさ、なのかな。勉強になります！

――なるほど（笑）。それでは、黒魅津さんの思う城山稲荷神社の好きなところを教えてください。

好きなところは、そうだなぁ、森に囲まれてるところかな、と思います。お城山の中の神社ではあるんですけど、鎮守の森がすぐそばにあるので、自然の中に急に鳥居と石狐が現れるんです。まるでファンタジー小説の一場面みたいな気分になれるでしょう？僕はこういう森の中で育ったので、やっぱり落ち着きます。それに、ここの神社は小泉八雲先生のお気に入りだったっていうお話もありますから……僕、すごく大好きなんです。だから、とっても光栄です！

――それは素敵ですね！それでは最後に、黒魅津さんの将来の夢を教えてください。

はい。夢は、立派な神使狐になること、それと、僕みたいな野狐あがりの黒狐でも、立派にお役目を果たせるんだと、神使狐を目指している野生の狐さんや、黒狐のみんなに勇気を与えられるような存在になりたいです。どうしても神使狐って、白毛の妖狐の方が多いから……でも、努力すれば誰だってそれを目指せる世界にしたいんです。そのほうが、きっとみんな幸せになれると思うんです。タマやかーくん、花観月さんと一緒に少しずつ頑張っていくので、応援よろしくお願いします！

黒魅津

元野狐の黒狐。まだ神使狐としての生活に慣れておらず、叱られがちだがあまり気にしていない様子。少々古風で中性的な話し方をする。教養やマナーには疎いが、家事や料理は得意で、誰かのサポートに回るのを好む。野生下で生きていたためか、本心を隠しがちな部分がある。甘い和菓子が大好き。

花観月

――それではまず、自己紹介をお願いします。

妖向け和菓子店小豆堂より参りました、小豆とぎの花観月と申します。どうぞよしなに！

――花観月さんは和菓子屋さんのご出身なんですね！

ええ、まぁいわゆるところの若旦那ってやつだね。まだ勉強中の身だけど、いろいろやらせてもらってるよ。それと、幼馴染の白珠玉に声かけられて、広報活動みたいなお仕事もさせてもらってるねぇ。若いうちからいろいろ経験させてもらえて、ありがたいと思ってるよ。

――なんだか大人っぽくて素敵ですね！ではまず、花観月さんとこの場所との関わりを教えてください。

関わりって言っても大したことじゃあないんだけどね。ここに、小豆とぎ橋っていう怪談が伝わってるだろう。そこに出てくる「奥様」の正体が小豆とぎで、その子孫がアタシの家……って言われてるらしい。ま、祖先のことだからよくわかんないけどね。でも、アタシの「花観月」の名前は普門院の観月庵から取られてるんだとさ。洒落てるだろう？

――そうなんですね！確かに素敵です。でも、ご出身は東京でしたよね？

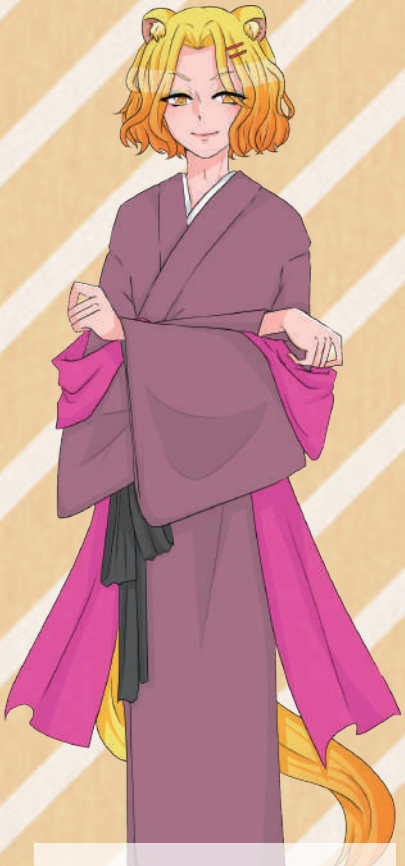
出身は東京の、神田のあたりだよ。親父が和菓子職人やるためにずっとそこで修行しててね。最近になって、母さんの実家……うちの小豆堂を継ぐってことになって引っ越してきたわけさ。ちっちゃい頃は毎年こっちに遊びに来ててねぇ、その時に白珠玉とは仲良くなったんだよ。あいつは昔っからうちのいちご大福が大好きでね、今でもよく黒魅津と一緒に買いに来るんだよ。

――そういうご縁で松江にいらっしゃったんですね！それでは、花観月さんの思うこの場所の好きなところを教えてください。

うーん、まぁアタシは直接普門院に関係があるわけじゃあないからねぇ、何とも言えないけど……ああ、堀川遊覧船に乗ると、船から小豆とぎ橋のレリーフが見れるのは気に入ってるよ。あれ、普通に話は好きなんだ。雰囲気っていうのかい？あ、でもアタシは別に杜若の花は嫌いじゃあないよ。まぁ杜若だか花しょうぶだか見分けはつかないんだけども……。あとはまあ、この街、ってだけで言やぁご縁というか、出会いだね。さっき言ったように白珠玉と再会したこともそうだし、何より翠葛と出会えたのはアタシの中で本当に大きいと思ってるよ。ずっと一人っ子だったから、兄弟が増えたみたいで毎日楽しいし、それにあの子はアタシの事絶対に否定しないで尊重してくれる。あとは商売の手伝いまでしてくれるんだからもう良いことばっかしさ！翠葛は計算と機械の扱いがまァ得意でねぇ！今までアナログでやってたお会計のシステムを全部タブレット使ってデジタル管理に変えてくれたんだよ！母さんも親父も相当褒めてたね、あれはアタシも尊敬してる。食費が倍くらいになったのもまぁ、許してくれてるんじゃあないかい？本ッ当に、よく食べるからね、あの亀……。

――ご家族での仲良しさが伝わりました（笑）。それでは、花観月さんの将来の夢を教えてください。

夢はもちろん、小豆堂の東京支店を出店することだね！今はまだ、人間と妖の分断、ってのはまだまだあるだろう？山陰は比較的マシだけど……だからアタシは、人間界と異界をつなぐためにも、人間も妖も楽しめるお菓子を作りたいんだ。そしたらいつか、種族や出自に関係なく、皆が手をつなげる世界になるかもしれないからね。その暁には、ぜひお客さんとしてきておくれよ！



花観月

小豆とぎの家族が営む妖向けの和菓子店、「小豆堂」の一人息子のイタチの少年。父親が東京出身で、数年前まで東京で暮らしていた。性別に囚われない美しさを愛しており、自分のスタイルを貫くことを信条とする。父親譲りの江戸弁が特徴的で、カラッとした性格が客からも親しまれている。いつか東京に二号店を出すのが夢。

翠葛

――それではまず、自己紹介をお願いします。

はい！名前を、翠葛と言います。月照寺の大亀の物語から生まれた付喪神で、今は和菓子屋さんの小豆堂でお世話になっています！まだ生まれたばかりで分からないことも多いですが、よろしくお願いします！

――生まれたばかり、ということですが……？

えっと、付喪神として生まれたこと自体が本当に最近なんです。それで、そのあと色々あって精霊の姿じゃなくて、ちゃんと地に足をつけて歩けるような実体を持ちました。なので、この体になってからは二年も経っていないんですよねー……

――そうだったんですね！それでは、この場所との関わりを教えてください。

はい！さっきも少し言った通り、僕は「月照寺の大亀」の物語から生まれた付喪神です。生まれてからは、ずっとお寺の中を彷徨っていたんです。今では外に出ることが出来るようになりました！でも、自分にとっては生まれ育った場所なので、定期的に遊びに来ています。それに、いま一緒に暮らしている花観月と出会ったのもここだったんですよ！人間の皆さんが和菓子を頂いてるのを見て、とってもきれいで素敵だったから、僕も食べてみたいなーって。それで、たまたま来ていた野良猫さんに聞いたら、妖怪向けの和菓子屋さんがあって、配達もしてくれるって教えてもらって。連絡してみたら、来てくれたのが花観月だったんです！最初見た時に、「お姫様みたいな方が来たなぁ……」って思ったのが懐かしいなぁ。話してみたら、さっぱりした若旦那でした！

――そんな裏話があったんですね（笑）。それでは、この場所の好きなところを教えてください。

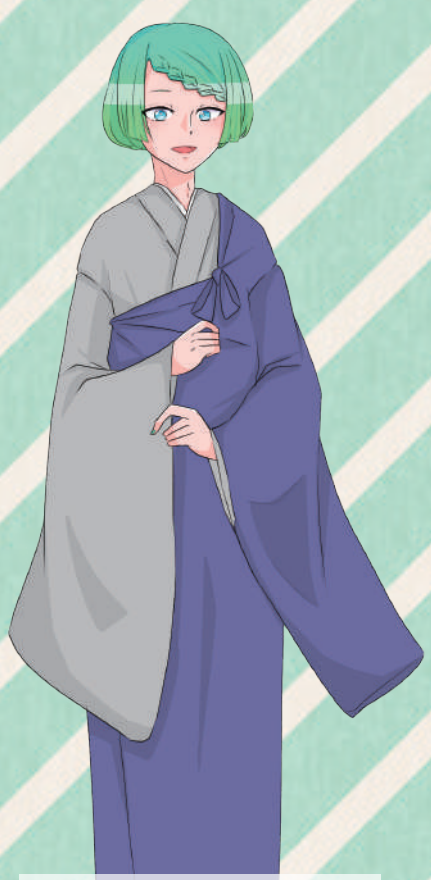
はい！好きなところは、色彩、ですかね？特に大亀……寿蔵碑のあるところは、全体的に木に囲まれていて、緑に溢れた空間なんです。それに、古いこともあって苔むしたりもしていて。風で葉が揺れる音とか、木々に日差しが遮られて周りより薄暗いところとか、地上なのは確かなんですけど、水の中にいるみたいですごく落ち着くんですよね。けど、階段を下りれば、季節ごとに満開のアジサイだったり、柔らかい蓮の花だったり、紅葉だったりが目に入るんです。そのコントラストが面白いな……って僕は思っています！あとは、受付の奥で見ることが出来る景色も素敵です！それにお抹茶とおいしい和菓子も食べられるので、おすすめです！

――花観月さんも言っていましたが、翠葛さんは食べるのがお好きなんですか？

あはは、そうかもしれないです……食べるのが、というか美味しいものが好きですね！お家でも花観月がよくご飯作ってくれるんですけど、彼の作るものはみんな美味しいので大好きです！とろとろの親子丼とか、あとはじっくり煮込んだもつ煮とか、照り照りの鶏団子とか……！いくらでも食べられちゃいます。あと、お友達の黒魅津くんもお料理得意で、よくご馳走してもらってます。みつくんは洋食の方が得意みたいで、この間は結構辛めに作ったケイジャンチキンを食べたんですけど、もう絶品で……！

――それはおいしそうですね！それでは、最後に将来の夢を教えてください。

はい！夢は……今探している途中です。まだ僕には知らないことが多すぎて……だから、たくさんの人と関わって自分の引き出しを増やして、素敵な夢を見つけたいなと思っています！



翠葛

「月照寺の大亀」伝説の物語から生まれた付喪神の少年。付喪神であるがゆえに、寺の外に出ることができなかったが、ある出来事をきっかけに外に出ることができるようになった。現在は花観月の家に居候をしている。好奇心が強く、新しいことを学んだり出かけたりするのが趣味。花観月の作った和菓子が好き。

石見川本駅

鉄の道で
地域を結ぶ
三江線

（江津市・川本町・邑南町・美郷町・安芸高田市・三次市）

Dustin Kidd

汽車の席に座って、駅から出発する。ゆっくりと揺られながら、窓の外を眺める。何も急いでいるわけではなく、この列車に乗りたいがためここにいる。近くを流れている江の川の青と周辺の山の緑が織りなす景色は、まさに絶景。いつまでも見ていられる景色。しかし、いつかは見られなくなる景色。それをわかっているからこそ大事に、大事に心にとどめておきたい景色。また、こんな景色があったよと話ができるように、できるだけカメラに収めておきたい景色。

4年前に、その景色が見られなくなってしまった。2018年3月31日、三江線の最後の日。朝から友人と出かけて、いろいろな場所でその最後の一日を追っかけていた。いろいろな気持ちが沸き上がって複雑な心境の一日だった。

しかし、話はここから始めるものではない。少し遡ってみよう。

1999年の9月。島根大学での留学が終わろうとしている。知り合った方から山陰（京都から山口まで）のことが英語で書いてあるガイドブックをいただく。その中に島根のことがどのように書いてあるか気になり、さっそくそのあたりから読み始める。そうすると、石見の部分に「The Sanko Line」というところを見つける。留学中に木次線～芸備線経由で広島への鈍行の旅を楽しんだこともあり、地方の列車に興味を持っているから興味深く読み始める。その記事の中には「廃線の危機に直面している」とすでに書いてあった。日本に戻ることができたら、必ず三江線に乗ることを決意する。

2000年の秋、ある土曜日の朝。初めて三江線に乗った日。その年の夏に日本に仕事で戻ることが叶い、再び日本の生活にだいぶ慣れてきたころ、浜田に住む同期の友人と一緒に乗ることにした。浜田から始発に乗って江津駅へ。その時間は午前5時半。なぜそんな暗闇の中の出発かというと、三江線の始発が6時半。それを逃すと次の汽車が12時台までない。その時間なので、浜田からももちろんだが、三江線に乗り換えてから、しばらく車窓から何も見えない。明るくなっても温度差で窓が曇っている。地域の小学生が通学のために乗り込んできて、少し話を楽しむ。石見川本駅を過ぎたら、高校生も降りて、私と友人以外に乗客がいなくなる。しかし、車窓から見える景色が素晴らしく綺麗で、それに釘付けになる。

中間駅の浜原駅に着くと、反対方向から来る汽車を待つ時間があり、二人で降りて駅前に出てみる。早いせいか、開いている店がない。どうしたら時間を過ごせるかと悩んでいたところ、車掌さんがやってきて、「ちょっとついてきて」と私たちを案内してくれる。江の川にかかる赤い橋の途中まで行くと、川下方向を

指で差す。そこからは、目の前の江の川とその向こうに紅葉した三瓶山が見える。鮮やかな光景に感動する私たちを見る車掌さんも少しにっこりした気がする。

時間が来て後半の旅も、しばらく二人だけ。停まる駅で外の景色をカメラに収め、ただただ三江線から見える景色に圧倒される。三次に着いて、また戻って、その日の三江線の旅が終わっても、しばらくその余韻に浸る。三江線に魅了された私はその魅力を伝えたくて、各沿線自治体の観光課に連絡を取ったうえで、２００３年に三江線沿線を車で走り線路、駅、駅名標、その近辺の面白そうな場所や観光スポットの写真を撮りまくる。その理由は、県内の外国人が参加する美術展に三江線のコラージュを出品するためだ。美術展を取材した地元新聞が記事で私の作品に触れる場面もあった。下手な部分もあったが、それも含めて私なりの三江線愛が伝わる作品になり、大変気に入っていた。

出品したコラージュ

しかし、諸事情で手放さなくてはいけなくなった。頑張って作った作品を捨てたくない。どうすればいいのか。そこで、三江線に関する資料の中で見つけた、川本町にオフィスを構える三江線利用促進協議会にそのコラージュを譲った。正直、今思うと向こうは少し困惑もしていただろうが、引き受けてくれてうれしかった。手放したときには、もう二度とその作品に会うことはないだろうと少し寂しくもなった。

本数の少なさと乗りに行くまでの距離の問題もあり、なかなかそれから三江線に乗ることはなかった。とはいえ、時々沿線を走り、駅を訪れ、運が良ければ通過する汽車の写真も撮る。島根に遊びに来る友達にも紹介する。その良さをいろいろな人に知ってほしくて…。

そして、恐れていたことが現実となる。三江線、廃線決定。廃線の前に撮りたい！　乗りたい！　見たい！　なので、廃線までの半年は幾度も沿線に行く。また２０１８年の２月に「最後にもう一回乗る」つもりで、浜原駅から江津駅まで乗った。全線乗りたかったけれど、予想外の大雪で一部不通になって、とりあえず乗れるときに乗るしかない、と松江の友人と出かけた。先に浜原から乗って、友人と石見川本駅で合流。

廃線までの最後の一年間、川本町の観

光協会の方々を始め、いろいろな人たちは石見川本駅や三江線を盛り上げる活動に励んでいた。その活動の中で、駅向かいの建物に休憩できる場所を作った。その中では写真の展示、三江線グッズの販売、飲み物の提供などをしていた。駅前で私を迎えた友人がそこへ案内してくれた。中に入って、いろいろな展示物を見渡すと、いきなり「あっ！」という大きな声が響き渡る。

私の声だった。

自分で自分の声に驚いている私の方を、店の中にいる全員が見る。

そりゃそうだわな。

友人が「お前、どうした？」と聞く。

いまだに驚いている私の語彙力が皆無で、「あれ、あれ…」と奥の壁に指を差す。

「あれがどうした？　ってか、あれってなんだ！」と突っ込む友人。

「あれ、俺が作ったんだよ！」

そう。そのおもてなし空間の中では、13年前ぐらいに三江線利用促進協議会に譲った三江線コラージュが壁に飾ってある。まさかの再会を果たした瞬間だ。

再会!!

カヌーに乗って

あとで川本町観光協会の方に確認したら、そのおもてなし空間を作るために、飾るものがないかと尋ねたらしく、倉庫に眠っている私の作品に目を付けて飾ると決めた。

信じられない光景のため、なかなか現実が呑み込めなかったが、うれしすぎて泣きそうになった（写真で見れば、その時の私の気持ちは伝わると思う）。そして、「あれ、俺が作ったんだよ！」と言ったあと、なぜか室内にいる人たちから拍手が起こった。

その作品と再会したことによって、私の三江線愛が燃え盛るようになり、その後数回、満員汽車の三江線に乗り、いろいろな思い入れの場所や、さまざまな角度から写真を撮る。カヌーに乗って江の川から撮ったものすらある（それは特に頑張ったと思う）。我ながらいい写真を撮ったなと思えるものを何枚か記事に添えているので、ご覧ください。

しかし、一度決まったことは着々と進み、いよいよ三江線最後の日、２０１８年３月31日がやってくる。川本を一緒に訪れた友人と沿線を訪れ、たくさんの記念となる写真を撮った。沿線の住民が感謝を込めて、さまざまな見送り方で、三江線を走る最後の数本の列車を見届ける。悔し涙を流す人も中にいる。私もラストランの汽車２本が浜原駅に入ってくるのを見届けたが、たくさんの思いがこみあげてきて、気持ちの処理ができなくなった。そのせいで、そのとき一緒にいた友人に失礼な態度をとってしまった。申し訳なかった。

2018年3月31日　廃線の日

今、三江線の廃線から4年が経とうとしている。多くの駅舎が取り壊され、線路がはがされ、橋が撤去され、沿線を走ると少し寂しい気持ちにもなる。しかし、廃線だからできることがあると考える人たちも多くいる。残されたものを自治体がJR西日本から譲渡してもらい、鉄道公園が邑南町でできている。また、宇都井駅と口羽駅でトロッコ列車を走らせる活動を続けているNPOの江の川鐵道が三江線の鉄道遺産を有効活用して、人々を呼び寄せるように頑張っている。最近は県境を越える試みまで活動を広げて、将来的には、可能であれば島根県と広島県にある宇都井駅・伊賀和志駅・口羽駅

宇都井駅の誕生日

を結んで走らせる企画まである。また、2019年の8月31日に宇都井駅の階段でそうめん流しを行い、1975年8月31日に開業したことから「宇都井駅の誕生日」と称し、トンネルの中を歩き、駅の誕生日を祝ったのはなかなか記憶に残っているイベントだ。

ほかには、川本町も石見川本駅でレールバイクや駅の施設見学、駅でキャンプ・ライブ・ヨガなどの面白いイベントも行っている。三次市の尾関山駅や江津市桜枝町の川戸駅でイベントも最近開催され、美郷町の粕淵駅でも面白い動きがある。あの頃車窓から見えたものはまだそこにある。車窓から見えないだけだ。寂しい気持ちはまだあるが、その旧三江線から今度は何が見えてくるか、わくわくする気持ちが強い。

（ダスティン・キッド　総合文化学科教員）

宇都井駅の誕生日

廃線前の宇都井駅

廃線後

夢が実を結べば
そこが居場所になる

NPO 法人松江サードプレイス研究会
（松江市）
山根繁樹

巻頭言をお寄せいただいた、山下武之さん。そこで紹介されているとおり、NPO法人松江サードプレイス研究会（以下「研究会」）の理事長さんです。「サードプレイス」という言葉に惹かれ、山下さん、巻頭言でも紹介されている勝田幸利さんのお話をうかがいに、松江市の京店商店街にあるサードプレイス倶楽部のカフェで開催された「おたから市」を訪ねました。

京店商店街

三重県生まれの山下さんは、毎日新聞の記者だった父が山陰で新聞広告の会社を興されたのを引き継ぎます。その後、企画会社プラン・ドゥを立ち上げるなど、松江を拠点にお仕事をされてきました。

２００９年12月、研究会は第１回の例会を開催します。山下さんが「サードプレイス」という言葉に出会ったのは、その頃松江市の副市長であった中村光男さんから紹介された「スローシティ」に関する本の中でした。巻頭言でも紹介されている「サードプレイス」の理念に惹かれ、それをすることで地域が元気になるならさらに良いと考え、「この人だ」と思う人に声をかけて研究会を立ち上げたのでした。２０１１年には、NPO法人の認証も受けます。ただし、NPO法人とはいうけれど、「ねばならない」ことは一切なし。集まった人たちが、好きなこと、やりたいことを言い合って、協力を得て実現させる。そのプロジェクトが人の役に立つとか、何かのためになるとかいった「意義づけ」は不要なのです。例えば、比較的早く立ち上がった「雨の日の松江」プロジェクトは、「雨の日の松江が好き」という気持ちだけで始まったプロジェクトだそう。「好き」だから、楽しみたい。みんなにも楽しさを知ってほしい。そんな思いがプロジェクトを動かします。山下さん曰く、「好きなこと、やりたいことが実現すれば、そこが自分の居場所になる」。まさに「サードプレイス」ですね。

研究会第１回例会は、勝田幸利さんの

お店「一風亭」で開催されました。勝田さんは、戦後間もない1948年、松江市殿町のお生まれ。当時の殿町には、同級生だけで20～30人おり、にぎやかで子供同士の繋がりも強かったそうです。今でも殿町の「5人組」で、いろんなことを一緒にやっているとのことでした。

勝田さんは、大阪の大学を卒業された後、松江でデザイン系の仕事を探し、山下さんの会社でグラフィックデザイナーの職を得ます。その後、プラン・ドゥなどで「まちおこし」「まちづくり」に関わるようになり、島根の山という山に登り山草を調べ、食べ物と自然に島根の特長を見出すようになりました。そして、半年以上空き家を探して松江市東持田町にあった一軒に辿り着き、遊び場のつもりで農業、炭づくり、燻製づくり、こんにゃくづくりなどを始めます。そこには、殿町の仲間たちの姿も。そこに島根大学の留学生たちを呼んで、外国料理を食べるイベントを1年半もやったそうです。最後に来たのがタイ。タイ料理のおいしさにハマった勝田さんは、人にも食べさせたいと、それまでの仕事を辞め、ベトナム料理をやりたい人とともに多国籍料理のお店「一風亭」を始めたのでした。勝田さんが会社を辞めてからも、ときどき食べに来てくれていた山下さん。山下さんからサードプレイスの話を聞いて、

勝田さんも参加を決めます。もともと人付き合いが苦手だったという勝田さん。好きな料理の繋がりから知りあった人に引っ張られるようにしてイベントをやるようになり、自分の知っていることを少しずつ話せばいいのだと気づいたそう。それからは自分からもイベントを仕掛けるようになったそうで、今回の「おたから市」もその一つなのでした。今の勝田さんは、自分のしたいことばかりをやっているうちに、なんとかやっていけるようになったとのこと。自分で考えて、自分でつくる。自分の好きなことを広げていき、深めていけば、人も集まってくるのだと言います。

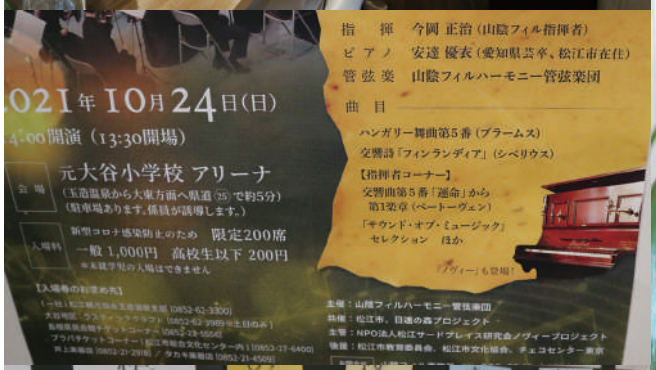
さて、今回の「おたから市」。「終活」の一環でもあるそうで、持ち物を整理し、使いたいという人がいれば譲りましょう、という気持ち。だから、つけられた値段も交渉次第。本当に「お宝」もありそうでした。

出品されている品々

自宅でも職場・学校でもない「サードプレイス」。あなた自身が本当にやりたいことは何ですか？　と問われている気がして、少したじろぐ気持ちもありました。それでも、「雨の日の松江が好き」がスタートで良いなら、気が楽になります。私なら、「水面の穏やかな宍道湖・大橋川が好き」でいきたいです。ポカポカ陽気であれば、いつまでも座って見ていられそう。プラス、ビールと、気の置けない友達でもいれば、最高ですね。みなさんはいかがですか？

（やまねしげき　総合文化学科教員）

勝田幸利さん



賑わうおたから市

編集後記

ふたつの記事を執筆しましたため、作業量が多くなったのがマァ大変でございました。考えていたことを形にすることが難しいのは充分わかっていたつもりでしたが、こうした雑誌の形にするのははじめてだったものですから、なかなか勝手がわからず苦労した点もあります。普段は読む側としてサラッと読み流してしまいますが、文章だけにとどまらず、写真やデザインなども行うのはなかなかに骨が折れる作業です。編集中、何度デザイナーさんを希ったことでしょうか。デザイナーさんは本当に偉大です。しかし、出来るだけのことはしたつもりですので、お読みいただく皆さまにもお楽しみ頂ければよいなと思っております。そして、編集部の皆様、本当にお疲れ様でした！

（彩）

今回、雑誌の記事を書くことに対して、はじめは不安でしかありませんでした。電話でのアポ取りもあまりしたことがなかったため緊張しました。しかし、自身の知りたいことを求め、突き詰めることにワクワクとした感情が取材をしていくにつれて芽生え、自信がついたことを実感しました。私は自分の世界に閉じこもってしまう性格のため、今まで体験したことのないことばかりでしたが、この授業を受けて良かったと思います。

そして、今回、取材に協力してくださったきものギャラリー八重垣松江店の皆様、先生方、本当にありがとうございました。私は春から地元の観光関連の職場に就職するため、この経験を活かして、地元の良さを広めていけるよう頑張ります。

（誓）

実際に自分で取材をして記事を作るという体験は今回が初めてだったため不安なことも多くありましたが、先生方のおかげで無事完成させることが出来ました。ありがとうございました。記事を作る作業は大変でしたが、記事で使う写真のために取材先である「Green's Baby」に受講生と先生で料理を食べに行ったことやフリーマーケットを見た時間はとても楽しくいい思い出になりました。個人的には、その時撮った山根先生のフリーマーケットの写真がお気に入りでその写真を記事に入れることができ、とても満足しています。

この授業を取らなければ「Green's Baby」という素敵な多国籍料理のお店を知ることも受講生と先生で楽しい時間を過ごすことも出来なかったので、授業を取って良かったなと改めて思っています。また、今回取材を受けていただいた柏井さん、お忙しい中取材をさせてくださり本当にありがとうございました。

（里）

例年、春の段階で履修していた学生たちが、秋になると履修を取り消していきます。理由はさまざま。慣れないソフトを使っての編集作業に自信が持てない、卒業論文執筆との両立に不安がある、学生生活最後のひとときを授業以外のことで充実させたい、などなど。どれもうなずける理由ではあるものの、授業担当者としては、ほろ苦い思いをかみしめます。それでも、昨年度までは6名、7名と、学年の2割弱は最後まで頑張ってくれました。でも、今年度は3名。発行できないのでは？　という不安が頭をよぎります。しかし、この3名、意欲もあり、文章力や編集センスもあって、なおかつイラストを描く力まで。この3名だったからこそ、コロナ禍で授業が遠隔になるなかでも完成できました。

今号では、小倉先生のツテを頼り、山下さんに巻頭言を書いていただき、勝田さんにもご協力いただきました。誠にありがとうございます。また、学科教員のダスティン・キッド先生にも記事を寄せていただきました。「むすぶ」というテーマが決まったときから、交通機関についての記事があると良いなと思っていましたが、題材に困っている学生はいません。そこで、ローカル線に造詣の深いキッド先生にお願いし、快諾いただきました。写真もキッド先生ご提供です。楽しんでいただけると幸いです。

（繁）

ひだまりのおと　第3号

2022年3月20日発行

編集　『ひだまりのおと』編集部

責任者　山根繁樹

E-mail：s-yamane@u-shimane.ac.jp

発行　島根県立大学短期大学部

総合文化学科

〒690-0044

島根県松江市浜乃木7丁目24-2

TEL.　0852-26-5525（代表）

FAX.　0852-21-8150

印刷　今井印刷株式会社

制作指導　小倉佳代子　山根繁樹

松江市　宍道湖岸

文化情報誌　ひだまりのおと　第３号　２０２２年３月２０日発行　発行者　島根県立大学短期大学部　総合文化学科